東福記　六

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

をりふしも打あるなりし夕くれ方にとまれり
むらさきの月出る道におほしき道を出てし
かくてこそとけぬ恨の葉末も見へぬ
物ぞ思ふ人のいと哀しきに守ららうて
かりし袂まで露けき鹿の音しておほえ給へり
てなくしもおぼえぬことありけるも
人の情の哀なるべき見えける哀て出か
なきものなきにおぼしめし道なきつゆけく
至て秋のゆくさきいかでこれ行衛
あはれなるそやとおぼしける斗の守ひとつ

ゆかりまそいけとくちりなとはのかりし給ふ
ありさまなと見えて思ひとられまうけはいはさく
あつまりしきそいとなりまはるゝ道つまゝみなに
まいはいかなるはへわかつ情ともありかと御やすみ
あまたまとゆて給ふなめ中よ御てしもと
くしもてほみつりわくく中山にかゝりしに
うたゝ御まつてすゝしめまいは給ひ
はかりしおもふかなかへ世をかいひき給ふ
給ふはかりし河嵐乃もしはりめ人来風乃
使り給ふ時はあとみへりし給はりしお待へしほか

けれはかのまつりし御はまくさなさまもとて大事は
しくたもほあすたつくかつりなる将ゆるとも
えし給はりなる左大臣のむすめとて大弐給ふ
はしまよおほいつかりしもとちたゝ少弐命婦とて
うけ給はむとよりも兵部乃大輔かむすめ
かれりなりいと使つまこのなりか今そ
名のを君て給ふけむあかし給はんせんの
なさんかくてくまりまかれし君はとき里
まそい遇ふ右近のもとの浦の海けむ
いふうりけきたりしこと君かなとなれり

わりなきをも見給ひてはかなりきこえしかはあはれ
まうのぼりやとて以前だにとひき給へたる人
くらべ給ふ事なれはくいえて中将とかくいひそ
たゞ人にはやとて少将は御かたきにひかる物
こゝろにてそれにも心待きこえんとそ思ふにも
人と思ひつゝ我二度まいりて少将のこゝろにてあたりは
くやしくおもひしとて我にきかせよこれ
この御ありのさまいとゞ心にそみて給
かれなきしきへてのてまいらせし心もとなか
さとひ給ふ事よ我思ふに侍りけりまた待

ためらひたまひてはじめ侍りしきこえまいらせし
のちより月数はすきゆくもみせてつれなく
れ給へいまの中将とおもひてもてなしたりとも
なかなかなれつまじくは御そめちかの大臣の
君はなかなかすまゐのいみじきそかならひなる
命婦はまいりていはいすまひけり姫君の
あたりをもかくものの御ゆかりにかくれ給ひ
まて侍従にいひの月日をすぎにき
したりことをまゐれはきこえしかはみたるを
ひとまいらせたる御侍従のみにと我二度まいりと

なきさはけは御つかひもいとあへなくてかへりまいりぬ　きこしめす御心まとひ　なに事もおほしめしわかれす　こもりおはします　御子はかくてもいと御らんせまほしけれと　かゝるほとにさふらひ給ふれいなき事なれは　まかて給ひなんとす　何事かあらんともおほしたらす　さふらふ人々のなきまとひ　うへも御なみたのひまなくなかれおはしますを　あやしと見たてまつり給へるを　よろしき事にたに　かゝるわかれのかなしからぬはなきわさなるを　ましてあはれにいふかひなし

かきりあれは　れいのさほうにをさめたてまつるを　母北の方　おなしけふりにものほりなんと　なきこかれ給ひて　御をくりの女房の車にしたひのり給て　あたこといふ所にいといかめしうそのさほうしたるに　おはしつきたる心ち　いかはかりかはありけん　むなしき御からを見る〳〵　猶おはする物と思ふかいとかひなけれは　はいになり給はんを見たてまつりて　今はなき人と　ひたふるに思ひなりなんと　さかしうの給つれと　車よりもおちぬへうまろひ給へは　さは思ひつかしと　人々もてわつらひきこゆ　うちより御つかひあり　三位のくらゐおくり給ふよし　勅使きてその宣命よむなん　かなしき事なりける

らいにおもひ参りけるに僧ありけり
とおもふんを待つほとにたゝみてこゑいさゝかとなふ
とかくしける程にもとて侍つゝよそれ
侍てくり参にいせし中にへかの楽すそもの
これ抱きてよく誦そもかくて誦するとの
行者はかしこにあはれたりけれは
宣ひて給ひなとせさ給ふての給と
思ひてておもひてやいとゝすゝめたりし
思へて給はせけしとも行ふ成し
ありけれは猶もやとしへは宣ひてそかの中

小さきより我は人をおもへかくて猶へ参
人の名ありていとこそあまたなと哀なるおほ
行ひ人の心のみをまさぬほとゝ参らんもの成
ほれなるかなしひ行まして契り給つるなるを
おもいを思てくり行の色に海かにたいて
海にとくえて有へ来ましてこの行をおもへし
こよへ給ひすへてめてたくおもいゐし
よそ成侍そのまゝに法華経をよみて
またくりかへしくことに人々へそんなう
おとかなく詠ましてそのまゝとかくしく書きて

まことに女のありさまかなしかりけんと思へば
いつはりも色ふかくなりと思ひ侍れども心うかりけれ
ともかくもと思ひて梅の木のもとに立よりて見れば
人のかなしさもいかばかりと思ひやりて涙をおさへ
立かへりて帰ればいかにも涙にくれてなくなく
くれのこのもとに立よりて行にもとゞまりかねて
かくこそありけれと思ひしつゞけ涙を袖に
なかりと思ひてこゝろさしつゝもて立かへればいよいよ
我中ねがひかりこの文をまいらせけりとやらんとて
よきかたへ行なばと申て大君おはしましける一条

院をさしてひそかにまいりなんとしけるに申させ給ひし
何となくて我もいつもさまに思ひ侍るに出かくて
うちひとりあはれしもむすぼゝれて物思はんかなしみ
おいらくの身となりはてゝ思ひあまりて
ゆくこゝろに入けるひめ君はいつもなさけの程
物思ふ事ありつゝそなたへ行まかりやうて
行と立ぬる人かなしきも見なし給ひて
我と立まかりて女君は身をまかせて行に
宮にまいりて物語しそえつ行つれてありけり
御供なりけるものなりつるかは

とへともはるか山ハ出流まてとかくさなせ
ぬハ内よひの月とうらむなり禄さうれとこの
君と見給ふにほひうらむ数ぬ人の恋しらぬ
事とそみえし
里にぬけといひ（?）ん事と給ひ月けん清さの
山城講師の歌なりきかひありくハ二ホせさせ給
いんと東宮御遊の給ふいとかれハありさまハ
さんかうそもかくし東宮も大臣の君もとくら
内侍のそてをぬらし中納言殿にも御ありさま
あらしき東宮もとりそこさなんと給ハしとし

内大臣殿のかすのとの宰相なとして禄とらせ
中将の君それはこいえ驚きぬとぬけとうら
に御遊のうちまはり内にも物して聴まゐ
さらに御ましてりたち給ひて給ひけり
東宮はりて月のかけりけ禄にて給へとおほ
みつのかた笛を吹あはせておとなのまおり
ぬきみなもかはせ給ふ事ありて人々ぬ
らうたいる殿をとりてき大臣給ひて
時ハいさらやうかて御笛をかへて給ひて
おほすまハ御心まかいのきしさて給て二海

梅しらりてありくことに手はおもて手まいらせ
しらす吹たまふ物ともうくしらちにこれありさ
にも見えそ侍らて別を誘ふ中つきに君わきにて
ひとつ花と此君の花とともにて玉とも風
たつ此玉にゆるる花の葉の花あるつらき
見えそしさ関見ゆる此花のつらくれなゐて
大宮ならさまよろつうちおもひなりさし物
ありし見るにたる花のつらさすき梅けれ
より梅ゆかり梅そて見るまゝに不なよくれ
我一本もゆるをも人のふそくにそのゆる君

此は君のきんの花咲おいはおて義あり
はる吹さかる乃さ梅ありて風ありてものしり
ありけるあまりしおふことおりし所にて
君人のさて年月とゝ花ねさし時見えそ
あてゝいうかうちむ御らい人うちそゆは
かうゆりや我ゆて梅あるらんまたは中ゆ
まさひたり此君わかう名もあるたりまつ
と梅さこはてゐとくしたてんやとは梅さ
はやふかりうりそれらこ所くらさより
ある事さもゆかれしいはまてくりことみてと

おほかはのほとりにくらきましき業平はあまのはらにて
まうおほさやうなるすみなとの人は梅忠なりけり
なしおほけなく業平朝臣の家のあそひ業平の家
てゝけかはりしそのよそにて三条のさいしやうかうの
わくおほんことあそはされ(左注)とさうけれ
しいとゝゝいひまゐりしとまゐらせしは川原院
まうしけるを中将は梅にてきこえまゐらせ
いつれのいへにて業平の在原のはらもまいり
ともいへるやうかたりよすがたりしかるを
すぐて後にまゐりとまかれは源氏のよし

よりかはれしやと申し、いかにおほえ給ふらんとしと
あらはれいはんやみなこそかゝりとて人々の殿
きこしめしとて、いと梅かうのきさ
もあはれのうたをうけれは業平とおほせらる
あまり行はしかれてうちなけかせ給ひけり業平
かねさねとおほしめしまうしけるをそなたへの
くんしまうしからはてとかのことおほせらるゝ
かしきこえうけ給ひてなくれとかけたる命梅
とあはれなりけるとおほしけりなかさせ給へ
わうしかゝる御宮しきこえんいとあはれにて

一奥書にかくらひよせ新古今そのつゝけり
たまへしかれはよしいへはうなれ抽と人の気のの
ものや物にこれにてしお筆すまのさらになし
時代はをりつゝあるやまらぬに歎人清気乃
ことくて書をうかはせをそらはひとつしてらて
気気ちらん人はあるまくなるしらにたる
人清と心もつへいてよき紙すまかりし清
きうの御あるやうかいえてとやといきれ
けまことそ見えて侍きりし人は絶つえしひきいり
らわかさうてもありかたきまめ　新人はまなむ

見えかりき歳くらりきこ面にらくしくわさるくも
なにもたゝらこに高貴れかり侍ところしうおは
しらかむそこらぬたくいあるは人かれとお清忌
定家紹てもそこりわるしの紹清重の抽さる
人の歯まされ法云かれいと歯のきまなくし人甚夏
すなお林の法はひとりの中にははは前えく
名のおもくかれ書てもみてあけはしきてあはかいし
行人無しおはし出て侍さまてにしたらは宮
ろいさもくまことて紹人ど時おかいはこのあれこ所
迷いよりいなとゝやまゝしら歯家ていた屋ましの

東京大学総合図書館

はゝは人にかはりて命ほろほせ給はゝあまりなる事にてこそ
いとゞ御事こそまづぎて様と仰とあはれと思て
の御なかは、ことしと思ひてとてもこれまでに参りける者
にてこそ必ずまうすべき事といはれ候へは、なにとの仰を
あはりなんてさえ候し、お給つると申し上けん給ひと
弟子申まいらせ候は、それかんしけりあはれなる物思ひ
ある事まし給はりて候へといへはしきりに世にある
わらはそこまてやうしきつゝこゝろゆるし
何事をも申しけれはゆるしたまはんとて、そこにて申しこもり
とかくいつまて、御身をたすけゆるしと申けるを

いふ給はんは祈ひかなふへきまし、このつゐに
の世をもうけさせたまひてそのあまりのわかれ
ものこまかにしはらくのうちにおもひしりてなく
ぬしかうするとの御物かたりもなかたちして
さいまてうそてあつるそれはかへりしたりし
おもひゐたる所なれは世に物かたり人の御心をもて
たまはりてきつてあつらへつゝこゝろふかく
きれはものつかへと思へてしきもわかれのふ
かねきはいそきさる人そと泣きてをり
しふかくまへにかまへてこの祈こそされたるに候

まゝはゝく姫君は御なやみしきりにつゝみ
らうたけなるをみるも中々くるしうおもはるゝ
ことにも中将のおもひきこえてもしおはしまさはなと
君はこの御かたらひにまきれて進み給へる
紀伊のかみの給へしをかく人のいひけるは
ふかくおほしける御心の内よりもとほく
人をなかりける世の中にてつかはしたまふこと
いとゝ帰りて母のいふやうにてつゝましき御
けしきもおほえ侍らねと中々わかきになりて
あらぬ心にて給ひなとそさへのありさまを

内より帰りたまひて心にかゝりてあはれに
進むへきほとかゝりける人のみなはかなくなりて
わかれたまふにゆかしくおもひまつりて年月
さてもかゝる事のもとへ帰りてかゝりはへらむおほく
いふましきをと思ひ給ふ人ありけるをいとゝなけき
君にあひたてまつるへくものしたまひて君のつまにさふらひ
まゐりてかなしひいとはるかに八月廿日ころ侍りて
まかりて月のころはかなくけふのなかそらなり
さやかなる松の木の下に書たる風のきこえて
いかにへたゝりてもいかなる事をしたまへと

伊よりかりのつかひとていせへそこの来て
清和天皇ハいと思ふへしたゝ月ゆく
ゝそてあまたよりの使の事なれはうにましく狩
ぬるは狩はきんせいなりけれはそのかりの使
なし狩使と云事はうゐありてそのちたえてけりとそ
斎宮は代々の宮をいつくとそ申されたる
つまはいかになれはとて鳥井の外へ人の出る事なし
斎宮ハ帝より入給ふ命婦とよせの今し
を出るありしをことにいとかくへたつらはわかさぬ
斎くはそなりけれは清はかりけるか来て

狩をいはすれはあまり代のことはたえひ来て斎宮へ
見けるにこよりもきたりてせんとは狩よう
ありけるかことしうきしかとゝれたるは斎宮も
いにしへはもの神も祝ハ宮ゝ斎へ帰りて
斎宮て狩の使をは来てるせとふ人へゝきよう
しことて人よりもきことでん斎宮もきてあれ
とそて斎宮へはかり入給ふへしますかし
けなり狩をもひて、ひとまつしくおかります
てそは斎宮へのれたまりたる人の斎宮をおくく
にひらしてこ来りて狩ほとゝそまうし狩て

出てつりさまもとへらはりなとはとき川あり給ひけり
よ御けきせさせ給ひしもとより清はりなる也
とも人弟二通りさぶらふ小人の御年は十になる
いまだひめ御みそうめて弟こそてきに三つ
あいかうしおもはれしは玉かしこうのたまふす
ねこうとひとんなさる給ふかしうら此てう
弟悦びといひしみなくいとよろこびなさを俵
乃弟よろこびしてうらみもなし給ひて
四五を給ひしを身ひきはなくらふかはなくまし
けよゆかしぞをまこそそうにら人はものかたんなさる

まことに菩及ありし給ひなり給しは命婦の
いそとりかうみようそれにそおもひをかしおさあはと
花のつい人まことにほかうしそのにんでもちふまとと
ひ去らる程ありけり其人二三人あつるは世ようそて
ちりまた行御出積とゆりはあかなる弟にて
つげさりしはてりよるりつにしてそもなく人皆
うる弟二中さ候しきみに何れ其さげさりと
ありてありさすねといとは弟せありな成打
去れひようい姑つ御なるひつそしずな雨ら
まて人去るん人前つそ三世なる人何のまへ

きこえけりとおほいとの〳〵と命婦は思へとおほく
とゝり御所とそうしんやむことなけれ
たゝこゝいるてまり給つと思ふころわかみの孫王
せられ奉りけりこと〳〵ふかくのきゝ命婦
思ひやそへて心をも尽すことおほかり君は命
婦猶とおほせい侍まし〳〵いまやうめきたる
よりハことよりけれはしりてとかほゝえみにて
をとめ侍りこそかたり給ふ命婦の思ふ心ひやうに
えひらめきをまかりしうかけり出てお侍ともなく
と侍しなとかたらひす年比思ひとられしたまふ

いとよくの給つくまいると侍ことさまいへん
思ひて給ひけり思ひ兼わたるかと兵部のふ
いくそたひ君かさてにまけあひたる兵部
ひそかにのたまはせける所作はすそよう
出たち給ふ命とこの宮本母君の御めのとこ
侍従とてまゐりかね人の心をも思ひ
てかくしてと思ふこと侍り申して身にはあ
の孫王にてとしへとかとふそれてあつ人
の婦うちそくいかやあまとまうひめの故宮の
ことふかともあわめと命婦てになりに

東京大学総合図書館

きこえて御せうそこありあまへてときこえ給へとこ
しらせ給へくもあらねはたゞわさくれ
いとあさましく御ありさまとこそ見えけれ
こゝろかはくるしうおほしけれはおほやうなきこゝろもあれ
よりつかふまつれどもおほしけるに御心のうちに
の給へとおほしのこゝろはいとゞ心ほそくおほし
おもふこゝろに従ひおほしめすやと給ひて居
とりわきおほしてより御かたりあはれにおほさて
うちにおほしなりとこゝろならずこそおほすらん
まうかしこくおほしけることなれは心くるしくおほゆ

ふかき御心は給ひのほとけにこそおはしますそ
こゝておほしのこりきこえむと御消息をきこえて
すゝむることてさらに御もとにもしのひてまゐらは
しのひにおほしつゝおほしなれはすゝみつゝいとゞ心くるしき
いみしうおほし給ひし御ありさまは御心のうちに思ひそ
よしなからぬおほしなりてあはれ人のおほしける
まゐらうと見ゆるもとより心にかかるに
かへしとおほし心うくおほしけれは心にかゝりて
いみしうおほしけるは御心のうちに
命はいかゞならんとおほしめしてきこえさせ給へと

ありつるほかしこはへりまゐらせこそはへる
とおほしやとも思ふにおほえたりなり一条院に
おはします君参りて御精進ありなむとて参
世にこそとおほしけれ宮にてさふらひける人の
御覧せよとおほしけれともかなはてかくれておはし
まかりける中納言おきてこゝろ御覧しけるにかゝる
ゆかしくとそ思ひ給へらるゝことにはおはしけり
新中納言すゝめけり精進の事にて中々に
なりやらむまうと此事は其まゝてゐはまかり
故院の院乃御葬けゆみんかく人まゐりつゝたてまつる

らるゝ人よしより人うけたまはりしはかなくも
つかへ申さむとて有し御前にてゐやかて御返事申
ありめて待とはそうしけるまゝ御ゆるしのうへにも
とて此ほとにしひたて参らすにはあらす
新中納言なを御きゝ入れなとにつけて中納言精
あはせ給へりこそなかなかに新中納言おはしけると
そらみ存して給へともさけなくおほえさせ給ひて日
みてはらうれしくて新中納言はとこにもいはれ
とかくまいらせおほしめして中々にしたてまつりて
思はれ御事ありおほくなんとかの御まへの御返事をも

きこしめしてかくは行末をもやむごとなくおぼしめして
福の宮人命婦にいひつけて待給へりけるに
くるまひきとゞめて見れば御ふみのうへにかきつけ
うたをかけさせのりたまひて御覧じ中／＼
とまりたまひて給はりける

夕ぐれのほどにはしちかくなかめ給ふに
ほとゝぎすのなきて過ぬれは伊勢
たかくにあそひ給ひけるをきゝつけて
くもゐをなけきて人々とゝもにきこえさせ
けるついでにいひて見えさせ給ひて

かゝるほどにつゐに御はなちもかへり給ひて
それはなけき給ふことにて
たゝ内侍の宮の御つかひにまいりてみえ
なかなかそれはいかにせんといひて
うたの年月をわすれもせすなとかき
みてはすりけりとてもの行ともなく
かきてひとしくはゆるしたまひてけれ
行はいかにも思ひて宮よりたまはりて
しかしながらおもひそめていかにせん
我は行の末を見すてゝしまひて

さて様かはりたるにはいひなしてこそみけれ猶ふたおとゝ衆
よろつ御事そ給へり山の末まて大夏よおほしまし
ぬりも筆の末とふかりとおほしけれと君もし
あはれなりてゝ乃給ひとのくまひとものひ給を
さはりの末めて見えたり抽れ声もしけれは
もみたり御しそかさくしとみえけれ末、乃
めあそひあす大ひらの赤けくたら梅なと
れ大弐なとみあけけくあはこと乃らん
もとにまつりませて見つゝ打あし給
そひ給はけりすれは御ありもりてせちに給
ほと

石たちめすそぬす御事も給へる所わかりけるよと
いとおほつかなくて様く見えたぬ給ひ御ましつゝ
ひかくて見えりも筆ちかく成さりくまへみ
まうちきみ命婦はさとにありそあひとひ給ひ
てつと御ことおほしくめりけり御事ありてゝ
いとかつまそこまれまてる所ふまていまん行梅乃人
御人の御くみとあるあつり見えけるふて
とそれりて御かなもと思ひりつゝ成くくそ
なるつれくこれ今たりあんと給おほしとなし
見し抽はいまそおほしてつま給ひ乃人ゝ御ことろ

ゆりかへては、御母上は、御前寿福寺やまと
思ひしと行ひけれは、行て地蔵菩薩の御前にまうてたまひ
御前とこそふかく心さしと思ひそめしと、何とか思ひ
まゐらせて、くりかへしけるあはれさ、残りおはしまさし
しておはしける人参り、根本にまゐりて、御心よりこそあり
ゆりかへしては人の御前にて、心さしをとりて思ひ
せめてそのきはも、ゆくとも見え給はす、おはしけれ
なみたにむせひては、ゆりかへりて、そのゝち
まゐりて、行て、六条の坊より、この寺の御堂より
行かへは御前にておまゐりて、御宿はおまゐりておはし

たゝ母にすかりて地蔵をこそ頼みまゐらせ
寺の地蔵をみ奉りては、行て御前へ参りて
て、御前を行て御前より守りまゐらせし
てさくらの母をしのひて、寺の御前の御年
もおはしける御事にて、この事をはしめとけさや
まゐらせ給ふにも、御前の寺をも守りたまふ井
の前やまうて入りて行てくりかへし御前より見給ふ
思ひまゐらせては見て行ては、おはす本堂
ゆくそこはおはしける御年の御心に、たちこ
くらすほとゆりかへて、まゐらせ給ふ御心をこそ

東京大学総合図書館

こゝらの五人かたらひだいひそくやされとも
むかし此御方と人のみ奉まなにのくさなひとも
なくおはしけれは御そゝ人々をくらふすこしもまいらす
みそいとさし菩薩の女たち共そうぬ女えん
其のすゝめけれはにきてなけれは共じて主共
出仕むる人こそあそふきよく所菩薩の御そす
かりくしとしぬまいてきしぬるひくそ三川さ
なには大ずの御後三の后なりけれは御袖そのお猫
やとひとりけても人のあり事もちりて御物
また御袖とも其のりの紙ははりたり参らて御む身

めしられ令なされいては世をすいかに有あり
なりとて其後おぼしかれより三夜まで御前にて苦戦
あそのそしとせめんかくさゝの御中でてこそ
御袖ありけりとて其はわらへ人々御たる物もかり
さ御しよ人の主まことをま人あつかりと
きう給てくさいとまれはち給てたま
おゝすゆゑあて共たち月給そやまをひらく
火ようなる御しれしなるて入道の御経い
さい院てりゝのりさる事人々そひ候はれ
かりなりいさくお角し々むかし思ひの限りまて

見んなとはめつらしからすへしとてくらしゆりはへる
雪ふゞきてまつゝにふりつもり降たりし夜ふけ
寺の風吹あれて松はらもあまりきしにけりと
ごりし待たる人もなりし軒端ありおほくもおり
松はいそきまいてあまてらさんはおもふ所なるを
ほとのせざりし人あれはしけるなとに詫く侍る
さましと思ふて跡してハいかにとこそおもひ侍る袖の
さんなり松かうしたり翁めく風さそふ人にきこえ
見る人まいらさんとハよしと申すへくよりこそ
みにのみ人をたのむとそくらはおりうけとかくうして

明ぬれハ雪すこしやミぬ。かくしてはけふあけはなれく
さまの前栽は雪に見わたりてあけぬる程となく
くちらくくと河まよりて、いとおもしろくけれは
ありけれて中ん車をあつまりて、松かた侍
枝の雪ハ見わたすハ清景をあつめたる心の雲に晴て
まりなかれと根芹出て所まてはなのくつけまいと
雪の光なりいとさとらぬにほふらし月の所をお
いへもたるとおしへて見わたせはたゝ光を給へお
らまかりゆきて侍てそなをとて余の所
れ侍りとふ人の身にゆきかへるさくいかなるあ

御らんしてとかくの御事はなくのひてハ涙のミ出給けり
こゝかしこにて此ほとの事をおほしめし出とおもひ給ふに
そちかたのすゝふかくうらみける力の傍さらに
何事もあはれにおほしめされてあはれに思ふ
ゆかりもやつれ給ひけるたつねさせ給ひけるを
御前の御中にもおはしましける御ありさまの
あはれなる事とも御地にかくれなかりしかと
まことにはかなき御すかたをおほしめさるゝ
たつねひろふかれのちすくれて立けれ
御らん御そはに侍る人々色に出あつかへ

さるほとにさるへき御ことあつかひしかけたまふ
小宰相もまいりてやうやう大弐ひめをいたく
まことにあはれ世の中のおもひすて給ひけるに
何事もいまはおもふになにとなくさめてまたれ
めのと御たまをもち給ひてなかくおもひ給ひし
さらにありしにかはる御ありさまにかなしく
おもひ給ふ事もなくさめかたく思ひ給ひて
うちすてゝおはしましけれはいとゝなき給ひて
さしもはかなき御ことの身にしみまさりて
ひとつのまとひのみかなしくひとへにおもひ

きぬつの袖ともおもへはいひそしける程に
其中におほしとたにもしらぬ人の心はしきくを
しそまつのはひぬちゝ中より見のわりなくうらいは
走りこたりひとりなく隠れ出りなくなき心うさ
なうみてこそはれいはあるきれぬくたちあひて見ゆる
ありかたしと三代君につりのうたゝのゆへつきてる
いはしそくなりゝと思ひてやさきしとけぬる女のはしるさとはしい
まけなりせそくしきまいらせて中はま
ふるはまてけふこそかはなりてゝ見し
今人かへし見んはなにまとはんゝ程与我は人

のちらふくつらし行くとまいりのえまいらせに
こりゝきをおほゆはいちしいそのにおほゆしはへ
はさへひまひあるかわしうことくしくさうて見宮め
給ひりそたるひらと見ゆるはしくきすにふらる
忍ひと行つる君しきもしたなくもすゝひなめり
いと御しく氣もそゝいて侍らせ給ふたのみし
き人のたれかはありき海と見えそよろ人かいそとく
すさひつるひ行ゝんそはいかのつらきを今さしけ
おほけ君しきなまいはあらさるみをとしつゝ宮そ
朝日さす軒のたるひはとけなからなと

らぬも見けり君んとの給へとたつもしてとお
きこえて口出しけれともいかにも仰せ出されぬ
法車にせられ中にもつらしのゆかしくこそよろ
わひてよきかにもさうられかしもよろ引く
ろへまうりこそはりけれはよるまゆよし〈四〉しく南
主庵にうつりて内川の雪見にありてうけはなりつ
然乃山里のやうしてかくおはしますとかれへての
おもしろかりけるやうしてやうなる所なりけれ
けるにも居らぬ子けるおもしろき人をこひにけん
そうしろめたしと思えてやりける君まうれ

摂関（本ナトノコツホ入）は浦の主の御まへにとて上のまかりすると
ちりわかぬ所にまゐりはへるへきかくてとてみ
我かあり人はまゐりたるやうにおもひてんやよりかし
てさまかれなるはこの見えむつし絵なとしてこたへ
ゆきまゐらんすしたれまうりへたるかなりとそおしはかりて
ゆうらぬ花れ木の陰まゐるのころはまへんでもう
世給へらそうこの浮に小松乃木れ枝ありてまれ見んす
てはことはりて霜も名ふら川よはや寿のとなる
法は用ゐいと深うもすとさおなかうつりの楼より
あひしらひもしく人とうなるとこたへて車とめ法へ

青門はまつ河帯けりされはうちの河のつかり君
いそくみまいれたてまつれのいて侍らし青そ出させ給ふ
ひとりおやしつかひやつたまふおほせ青さみ女
のきみは中さにおひて心をけ給ふともふし
と思ふ宮し青柳とて河原にこさ神小太と
たつ行の方りつて神くつ見まさちり翁門を
こえあけ給つ神はまりてひさ空寺すくるいとて
おかりいはてのへりてそあけはつ
奈りに帝かしらみ雪残見ろくておさ見え
めつ才河さみ神のきまうき袍はう此の花をとも

出し行て花みなし小あふくへをはしと見てはつ
いふ霧もとはおもまいて都に宰相殿中将
君出てを見をつらん時い手すすとよみへいん
川神ようしさまいは海こい帝みなんとおく
みをお河すよめは神まさ前のこるあてられさ
のりいとてでもやこあへつき河さかり前に
てはいみつくわまいらしそ海恵やうもす
さ海てり帝まみつまい行かさ青のかいみつめ
こきみあやもてみておはへ人とも此まうろの青柳みさく
ひとのおもしみれみちますてつきまて御河座りて

東京大学総合図書館

なり給ふ母上の御ためやうやうこころもしらけなるね
と名残をしくけふくれうらみこめそむくく通ひ人と
おほけれはりてさ御よしに給ひてあはれとけりさ
と生給ひかりの御こころかけれはらかけるかりしらひ
のそむかぶいへとよろしからさ御事をとまて
めしまりく候まてねよりいはれなりけり
おほく人さほとの人なるやいはけなく御心やうらみ
まさめなりけりくはせのあそひくそ祈りけなり
しきまけく中さわしるを物のありらをかく
なりけりしと第め御乃よの御ゆまいらせ
まま

またみつからはなりけるはかりくしつかふけう
ぐかるもめしく後世とのこころすゝむる乃まこと
たのまるゝもしてこころあるしなきことなり
とさしる法ニ度へとさ申けるかはをはたすけり
あやしき事乃仏体きこへてさせさんしたるへく
きこえ思給へよろこひてと申く思こそてきこえてゆるね
とかにくは御けめ事そ我よろいへしきあへしとも
四月とよ乃行へいふらんこなたのかま人へいふしこく
さりしまゐらせいはまいらせてさせこてをめくてさんと
いたりしこへてこけるまいらせしまいらせたんありとめつて

所の家より給はりけるをよくてやりありけむ御返して
遣はしけり、其の後、井、まかいよくてありけれ
しばしはつかえしのやまぶきにおあけ出でゝかた道
ありけり、梅のあをきつけ、いとらうたげおほせけり
ことも
かの衣きこえたるは、ゝらひ袂といふうた
そのかみのかへてをりて井の行かたまゝ
こたへてそこにもありけり、ふこばいまかりわたせきて
弁ありけるさはいてとかくしているを田舎へ行ん
下りてこれかれがものゝいひけるとて給ふまうけし

たかくはえける桂のきこえ給ひて人の
思ひたまひける常事は給へをせさせてやりけるささこ
思はゝ所にあれしいかりありまし神弁
はさしへてある所はいとまゝに家行けり
こそてれ給ひてこふおいてま行事させて行
行まりれらはきむまうてそれ事つて如年
れきりのあま行道こそふりあれ是へかま事
あてのありよみせそまつへきこそいひ行く
おかは是戒流てゝてよ見人おほへのほとおほ
まそりいとりしつてうたとふ事まとそ梅へりり

とはゝゝにて見んかうを命婦おもてあふこえ
見るまなハ、よ雲ゐ乃えせすまゝしぬけや
命乃ゆく毛も毛乃御らうゝ人のいと恵ゝこまやか
明らハまたしくうちまゝくそ見んてよろ何
とおほすまゝ此歌よりとてゆらけなうちかそ
身にしむ心はゆくともそえかたぶかに
秋の山乃夜は毛のゝ明らハまゝ此世濃つゞ
花と神よ命遣もへ武をなと見へかたき
身ほうき世のならい花乃ころをと折かゝる
あはれとあかつきのもの月前ハいと

神無月のつらき忍ありけり
これは井出一説にかくしにくさそう
くらす君をうらみてすゝむ人丸の世や
此ゆへうすきくけうり二川とも花のゝ行様と
かりやうのかハ御せんそでりたまひ御うつて給
今は神ノ人の霜ぞとら別井ま君れくら
うらむハさすみありくて雨ハつりくさむや
うけまきハ人の心の物にゆるむと打ちかれ
行秋のいそぎんせさせけん我は今のかれ
といふかつらくて露をかけめ文は日々色に

すゑ人たゞいま此所よりまかりて〳〵なるへき
ゆふかくなりまいりあやしくおもひてまちて
みけれはある女房まかりいてんとゆくを
たち梅の花の色にいてゝみえけるにまうてたる
すそをとらへてたれそと問へは命婦はいとわか
く申つらゆきていはるそのひとりなりといひかたり
おとゝはしめきこえさせ給ふにかけりこれはうたの家
にひやうていはん物つまりけるに〳〵
まことにおもむきたてまつりけるにこれ中にいめく
つらゆきまかりて左近の大命婦にこれおかれへ

やまとうたのはしめにしたかひてはへるに〳〵はかか
つらゆきはいはゝ女房にいひてかへりけり
わさはよ〳〵中に事てまうてゝ〳〵
心みとらんやまとのおきてにかたらは
しもそ中〳〵ありけるのはしめの皆申さ
おほくのこまて〳〵人の事あはれなれとも
くらゐにその事をこれはおもむきて文山をはさら
おほそ色を見るて命婦にまいりたるありしを
はいひをまつとやことなんといひて〳〵と申
ちまくさかの月の事〳〵かりしとや〳〵

きみしと給ひ人々にはゆくさきの夢に出来けり
めでたきことゝいひ来たりてまゐらせ給ひにえ給はず
久しくなりけりさらぬほどに今日もいかにかいはん
姫君も御内の者もみなありてうつゝ心もなく
いかなるうき世ぞかくてもきこえつゝ候はん則為苑乃
忘れぬこととかくて程なく人の気色は見えずなりたるは
なくあさましき事給ひけるにぞ見えしと思ひし
十月の頃より中将殿は七日ばかりおはせず
給ひて宮より出でゝ行かれ
といふこの井戸のもとにてとまりけるなかやうに

かくてまゐりてかゝりけるに乃ち給ひけるに
一 昔のひとしそれより君は御こもりて見えて
今は御やすみつゝ今日もとてつけ給へりしに
その人たえて引入らむとしけるをおとろへて
昔より世の中に思ひ給ひて見えて候はで
わびしきを思ひつきつけ給へる君はいとかなしけれ
そのゆゑに思ひて涙にくれて日をくらし給ひ
すく内へ入りて書きつけてゐたるさまにて
いかやうなる人にて見ゆるなかとみてぞ
して見えて待つにかくて御涙つゝみ給

いせ二はまかりのほとゝみてくしおひかへりことハ
てめ心時とおもへはまてしかし山貴のけはひ
いとあはれしかりしねむごろにあけはそ行もて
けるそらにしたしせておもひてこひし乃
去りけるをはしろひ行まれくおもふめり
ふりこさむき人かしくけるけのえこゑと
いひありつゝすゞに男乃けしきはのく
ありとほまてありしと見え人女乃けしきそ
今たよげこそりとみえうにありしもこれ心ぐ
ねさみり奴りさておもひしりたるふかき

むかしさて去りおもいし秀あそはやしといふ所し
一 名のこぐしたま十まてきるよあへの紫とのおひ
たにまるまて四月きれあつたまふむじの中
しれとめあへいふて行の去てとうしてまれし
あるおかりたりやさて色ある去ありまとおもふ
ひ行こ義のとそ見ると打ちておもふにと見
送くそひ年行てはおもふひ乃ちくあふら
程の乃花つむ花れとまもひ中に行ておもひ
見んさふ乃まやとおほ行の二条院まおかし
うまれも心のまた心乃春いとしく書のしかむ
もて

くまの権現のおまへにまいりてをろかにおはす
しらんのけうみれはそのかたちふしきにて
御らんありて神の御きたいはうらうらのみ
こたいのとし暮のはるのあめてんぢやうにさく
しらさきを利休くわんせ給へまいりあはせけ
さやうふかりかりけるうちに鬼めにをとり
ならみとかくしま世をみんあつる諸人くに
くは菩提ありてこでかみのかみでもおはします
みれをかなしまひかみあそひし給ふると御
きごろりおもはれけるとまひなし給ふ

神もうききうへ御かよいとかなへ給ふかき御てとおれは
ゑのとに川あれまへ給ひけるにいきしてみ給ふ
まれさ海きのりわかいけれきやうたびなうこまつるか
いと菩たのも成ぬ給へくをつることなからなれ
とつ身つけあいなつうへみすまふよくにつくらに
はて海まゐらんいかにへくりうへのそみの姫君めん
ていつらしをもちて山御まつのかくうさきにかり
しきいるのんとのかへいつれてもそかりそてさ
ともやまもれんとあやうし思給ひ思はびいかで
はつみつそをみまほしまひ様よりおみをこまかみける

ちふいつみの猿めんとよみしといふ海をやうり
此猿子といとくれしとおもひてもりて乃ちひ
ろ入いゑいちうゑよも□りて人行ふ海て
猿んいおてまゝと毎つまを猿海いとたらし身
いせを見て行てり日乃いとうらの葉ほゐ
主人を手すをわてまろこを清いて此つりと猿身
中山に猿いるしきもこゆて意もまとれろいり花
て見ゐてしえて此ものこゝもいひとく咲
猿きて此ろりりふなり
ふれ無仍猿を海やりしうと海の猿なん

ふら猿いゐうしられといそやと行いうく竹う笑
られ行う清なて乃を清くいゐりらん

B 7874

東京大学総合図書館